

北京郊外香山に中国科学院所属の7階建の大ハーバリウムができ、専用バス数台で送迎するほどの大スタッフを抱えて活動している。前述のキューやバリーの植物園には、それぞれ、600万点という規模を誇るナショナル・ハーバリウムがある。こうした世界の趨勢にもかかわらず、わが国の文教・大学行政では遂にナショナル・ハーバリウムはできず、日本最大の東大植物園や東大資料館両者併せても120万点の標本をもつにすぎない。それにしてもこのような基礎科学に対するわが国の文部行政の処遇は、いかにも日本的である。最近、ある科学雑誌に次のような指摘があった。日本の科学研究に対する投資は他国に比べて決して劣るとは言えないが、未だにそれなりの国際的な評価を受け得ないのは、基礎科学をおろそかにする国家的風潮が国際的信用を失わせる結果をもたらしているためだと。誠に同感である。

現在、環境庁の事業の一つとして、都道府県別のフロラ作りが進められているが、基礎的具体的なデータはすべて地方の植物研究者に依存しているにもかかわらず、これらのデータ提供者には何らの報酬も払われていない。わが国では、目に見える技術料は高価であるが、目に見えない基礎的な知識はタダ同然なのである。

インドの印象をいま一つつけ加えておこう。私は、今回の滞印中、ジャンム・カシミールの首都スリナガルにカシミール大学を訪ねたが、ここでは1981年、植物学部から植物分類学センター Centre of Plant Taxonomy が独立した建物として発足し、小さいながらも2人の専従の植物分類学者、3名の研究補助員をもった完全なハーバリウムとして活動中である。私の所属する金沢大学理学部には現在175m²の別棟のハーバリウムがあるが、発展・充実されるところか、ハーバリウムの面積は規準面積外としては認められず、大学移転を目前にしてせいぜい15万点ほどの標本ですら、保管場所の確保に頭を悩まさねばならない。これが経済大国日本の現情なのである。

4. 南インドへ

インドの国立研究機関といえば、南インド・パンガロールのインド国立科学研究所 Indian Institute of Science (略称、IIS)を忘れるわけにはいかない。ここには、緑あふれる実に広大なキャンパスに生態学センター Centre for Ecological Sciencesをはじめ、バイオテクノロジーからロケット工学に至るまで、科学のあらゆる分野(25部門)を網羅した一大研究所がある。私の世話をし

て下さったのは、生態学センターの面々であったが、ここにはC. J. Soldana 教授の主管になる西ガート山脈のコレクションからなるローカル・ハーバリウムがある。私は、早速教授とともに標本や文献を検討した上、調査行のルートを決定、8月下旬、西ガート山脈に向けて出発した。西ガートとは、デカン高原の西縁を占める高地で、海拔1000~2000m、一帯は照葉樹林帯であり、茶の産地としても有名である。この高地の小都市ウータカムンドは、ニルギリ茶で知られるニルギル・ヒルにある。そして、ニ

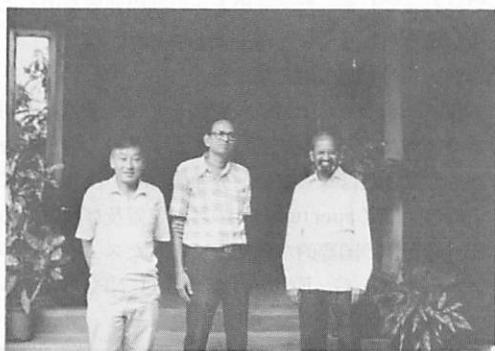


写真2. IISのSoldana教授(右)とBobyn教授(中央)と筆者

ルギル・ヒルの一角には、ユネスコの人間と生物圏計画(MAB)のためのニルギリ生物圏保護区 Nilgiri Biosphere Reserveがあり、IISの生態学センターによって管理されている。私は、西ガートの山々で10日余りを過ごしたが、この自然保護区では野生のゾウやクジャクを目撃することができ、探し求めていたImpatiens Subgen, Acanlimpatiensの面々にもお目にかかることができた。

今回の滞印期間中、INSAを始めインド各地で大学や研究機関から暖かい援助を頂いたが、関係各位にはこの誌面を借りて改めて厚く御礼を申し上げたい。

(本稿は、科学随筆誌「蟻塔」に投稿したものを収録した)

〔植物ニュース〕132. ヒメタケシマランの黄熟品 *Streptopus streptopoides* (Ledeb.) Frye et Rigg 1988年9月21日に、金峰山の針葉樹林内で黄熟している本種を見た。黒熟するクロミノヒメタケシマランは記載されているが、黄熟するものは、記載がないようなので、キミノヒメタケシマランとでもしたらと思う。(今井建樹)